

賞賛する力が農業界を強くする

植物を育てる農業には、人間再生の機能がある。都会の農業は、疲弊した価値観の転換をはかり、メンタルなケアを行なうことを目的として生まれた。一方で、田舎の農業は、地域を存続させるための生活の糧として存在する。「癒し」のための農業も「生活」のための農業も「生活」のための農業も、どちらも等しく、農業の発展に寄与するものだ。

農業の多様なロケーション

本誌12月号で、高橋がなり氏から本コラムが面白くないとの指摘を受けた。それにより、いまの時代の「多様な農業のあり方」を典型的に促す機会を得た。がなり氏に謝辞を述べたい。

がなり氏が批判した意図は「効率よく儲かる農業の仕組み作り」を述べるという姿勢が当たり前でツマラナイとのこと。私は戸惑いを覚えた。同じ農業といっても、がなり氏と私のロケーション（立ち位置）はまるで異なる。

農業を大きく分ければ、農的暮らし、農的副収入、専業農業の3つに分類できる。細かくいえばさらに枝葉で分けられる。そこで農に関わっている人たちは、それぞれポリシードったたり考え方も持っている。そのため、農業政策にしても、全部をカバーしようとするのは不可能となる。

例えば、食料自給率をあげるのか、それとも、日本の農業を産業化するかなど、ピンポイントに焦点を絞り、展開する必要がある。

田舎の農業と都会の農業

がなり氏と私の農業の何が違うかといえば、私は田舎で、がなり氏は都会で農業をしている。そもそも我われの住む村には産業がない。暮らしを守るには、地域の持つ資源を最大限に活用して、産業を創り上げていかなければならない。一番豊かにある資源は農産物を生み出せる土地であり、その出口としての農業なのだ。そうして産業を創り雇用を生み出さなければ、地域そのものの存続ができない。つまり「生活」のための農業をしているとあっていいだろう。そんな中、マーケットについて勉強し、需要に対応した生産のあり方をつくることで発展してきた団体が和郷園である。

一方、がなり氏の住む都会には産業があるため、仕事もある。しかし、選択肢があるがゆえに、その中で競争に勝てなかったり、人と接するごとに疲れるという新たな問題が生まれている。植物を育てる農業は、人間本来の本能をもう一回植え込んで、生き抜く勇気を与えるような人間再生の機能を備えている。農業により、経済価値に隷属した価値観の転換をはかり、メンタルなケアを行なうことができる。都会の農業はいわば、ある種の価値観を背負った「思想」の農業といえるだろう。これはロケーションとして十分、価値のあるものだ。

まずはこの異なったロケーションを整理する必要がある、いきなり同じ土俵で語っても、建設的な議論にはならない。

田舎の農業も都会の農業も、どちらが間違っていて、どちらが正しいといえるものではない。お互いの背負っているものや方向性が異なっ

和の郷の精神 ①6

木内博一の
のマネジメントと

和を育み

We bring up harmony

郷土を敬し

We respect our native district

園芸を志す

We aim at horticulture

木内博一・Hirokazu Kiuchi

1967年千葉県生まれ。農業者大学卒業後、90年に就農。96年事業会社(和郷)を、98年生産組合(農)和郷園を設立。和郷は2005年に(株)和郷に組織変更。生産・流通事業のほか、リサイクル事業や冷凍工場、カット・パッキングセンター、直営店舗の展開をすすめる。05年海外事業部を立ち上げ、タイでマンゴー、バナナの生産開始。07年日本から香港への輸出事業スタート。現在、ターゲット国を拡大準備中。本連載では、起業わずか10年でグループ売上約50億円の農系企業を築き上げた木内の「和のマネジメントと郷の精神」。本連載ではその「事業ビジョンの本質」を解き明かす。



恒例の和郷グループの新年会。昨年を上回る約240名の仲間が集まった。「新たになる挑戦～6次産業化に向けて～」というテーマのもと、1次産業としての農業だけでなく+2次(加工業)+3次(小売業)=6次産業化に向けて事業展開していくことを語った。

求められるのは ポジティブな姿勢

いても、社会全体の方向性を考えた場合、そこにある「よくしたい」という思いは同じだ。

がなり氏は坂上氏の連載についても記している。経営者が「ビジネスの足し算、引き算を当たり前前に解説しているだけ」で、「そんなことをしているから農業がカッコよくならない」と主張していた。坂上氏は連載で、

農業のデータを正確にとってデジタル化し、スケジュールや農産物の予測をしていくビジネスについて説明している。データ管理により、リスクを最小限に抑えようという試みだ。その目的自体正しいし、農業者はもちろん、異業種に対しても農業の現状を広く開放している。農業のことをわからない人たちが記事を読んだとき、通訳のような役割を果たし、農業への理解を深めやすくなったと思う。たいへん素晴らしい社会貢献ではないだろうか。利益追求の

部分だけをクローズアップして意見を述べるのは非常にもったいない。それらが生みだされた背景や、発するメッセージに対して、賞賛を与えるべきだと思う。

批判からは何も生まれない。人は必ず過ちを犯す。しかし、その過程に真剣さや志があつて起こした過ちに対しては、賞賛する機運を作っていく必要があるだろう。ポジティブな姿勢を持たないかぎり、思考は現実化せず、産業は発展していかない。